史料紹介

『看聞日記』現代語訳（二六）

薗部寿樹

本稿は、室町時代の皇族・伏見宮貞成（一三七一～一四五六）の日記『看聞日記』を現代語訳したものである。本稿の底本は、小森正明氏代表校訂『図書寮叢刊　看聞日記』三（明治書院、二〇〇六年）である。難しい語などには※の印を付け、その条の末尾に註を付けた。また、日記底本には改行がないが、訳文は内容に応じて適宜改行した。なお、敬語についてはやや不自然な表現があるが、当時の伏見宮貞成の微妙な立場を勘案した結果である。

○現代語訳（一）～（二四）応永二三年～三〇年（一四一六～二三）『米沢史学』三〇～三七号・『山形県立米沢女子短期大学紀要』五〇～五七号・『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』四二～四九号（二〇一四～二〇二二年）

○現代語訳（二五）応永三一年一月一日から四月二九日『米沢史学』三八号（二〇二二年）

本稿で訳出したのは、紙幅の都合上、応永三一年五月一日から八月三〇日までの分である。『看聞日記』を現代語訳した経緯などについては、（一）を参照されたい。

本稿により、『看聞日記』の面白さを少しでも多くの方に知っていただき、さらに底本に当たってもらうことができれば、本望、これにすぐるものはない。皆様からのご示教・ご叱正を切に望む。

【主要参考文献】

横井清『室町時代の一皇族の生涯』（講談社学術文庫、二〇〇二年、初出一九七九年）
位藤邦生『伏見宮貞成の文学』（清文堂、一九九一年）
小森正明代表校訂『図書寮叢刊　看聞日記』一～七・別冊（明治書院、二〇〇二～二〇一四・二〇二一年）
村井章介「綾小路信俊の亡霊をみた―『看聞日記』人名表記法寸考―」（同『中世史料との対話』、吉川弘文館、二〇一四年、初出二〇〇三・二〇一四年）
同「『看聞日記』の舞楽記事を読む」（『文学部論叢』一三八号、二〇一五年）
同「『看聞日記』人名考証三題」（『日本歴史』八八二号、二〇二一年）
同「『看聞日記』の引用表現について」、『古文書研究』九二号、二〇二一年
松岡心平編『看聞日記と中世文化』（森話社、二〇〇九年）
植田真平・大澤泉「伏見宮貞成親王の周辺―『看聞日記』人名比定の再検討―」（『書陵部紀要』六六号、二〇一四年）
植田真平「伏見の侍―『看聞日記』人名小考―」（『書陵部紀要』七〇号、二〇一九年）
田代博志「山城国伏見荘における沙汰人層の存在形態と役割」（『中近世の領主支配と民間社会』、熊本出版文化会館、二〇一四年）
松薗斉『中世禁裏女房の研究』（思文閣出版、二〇一八年）

五月一日、雨が降った。「良い兆しがあり、すべての事がめでたい」と予祝した。いつものように月始めのお祝いをした。恒例の薬玉を宮家の女性たちが作っている。

二日、雨が降った。等持寺法華八講が今日からまた始まったそうだ。書類箱数箱を虫払いのため、蓋を開けてざっと眺めてみた。雨中の徒然を慰めた。

持明院殿御歌合

三日、晴。姪の鳴滝殿から御歌合五巻をいただいた。鳴滝殿のご住職は、去年の冬から脚気がひどいそうだ。それに老齢なので、回復の見込みがないとも仰っていた。それで御歌合を差し上げた次第ですと御手紙に書かれてあった。とても驚いた。

この歌合は、持明院殿の歌会記録である。光厳上皇のご自筆も交じっており、大事になさっていたそうだ。思い立ってこちらにお贈り下さったのは、うれしい限りである。

菖蒲を葺き、薬玉を贈る

四日、曇。いつものように屋根に菖蒲を葺いた。室町殿に薬玉をお贈りした。前々は田向前参議が持参して、広橋兼宣を通して室町殿に差し上げていた。しかし広橋ではなかなか室町殿のご機嫌がとれないため、勧修寺経興中納言に取り次ぎを命じた。勧修寺は取り次ぎを了承したので、薬玉に私の手紙を添えて送った。足利義量将軍には御所女房を通して薬玉を贈った。娘の入江殿御稚児にも薬玉を贈った。御稚児への薬玉贈呈は初めてのことなので、特に娘の長寿を祈り籠めた。その他、例年のように人々にも薬玉を贈った。

夕方、用健が酒樽一つを持参して来た。思いがけないことで、すぐに酒を味わった。

夜になって、薬玉の使者が帰ってきた。使者が語るには、薬玉の到着が遅いので、数時間も室町殿御所で待っていたそうだ。そして薬玉が着くと、すぐに室町殿にお見せしたそうだ。室町殿はめでたくありがたいことだと仰っていたそうだ。将軍の女房からも返事があった。入江殿からも特におめでたいとの返事だったそうだ。

五日、晴。「端午のめでたい時節で、とても幸せだ」と予祝した。風呂に入った。その後、いつものように御節供のお祝いをした。お祝いには田向前参議らも参加した。

琵琶法師の城愛座頭

琵琶法師の城愛座頭が来た。平家物語を一～二句語らせた。

後小松上皇女房大納言典侍の密通事件

六日、時々雨が降った。ただいま聞いたところによると、後小松上皇様にお仕えしている女房の大納言典侍殿が逃げ出したそうだ。大納言典侍殿は故甘露寺兼長大納言の娘である。土岐世安との密通が明らかになったためだそうだ。ただし本当にそれが理由かどうかは、はっきりしない。

世安のことを上皇様から室町殿へお訴えになったので、世安も逃げ出したそうだ。それで、室町殿は土岐持益美濃守護に世安の討伐をお命じになったようだ。世安は土岐家の惣領で、伊勢守護である。このようなことで失脚するとは、かわいそうなことだ。

ところで光台寺の老僧光意が今朝亡くなったそうだ。これもかわいそうなことだ。

七日、晴。聞いたところによると、大納言典侍は妊娠していたそうだ。日野資教一位禅門以下の上皇様近くに仕える者たちは、起請文（※）を書かされたという。ただし、やはり世安と密通したのだろうか。実

際のところは、よく分からない。

大納言典侍は逃げ出していたが、さまざまに捜索が行われて、見つけ出された。それで今は、ある人に預け置かれているようだ。

※起請文（きしょうもん）…自分の言い分が嘘でないことなどを神仏に誓う文書。

八日、晴。御香宮に参詣した。息子も同じくお参りした。田向前参議らを連れて行った。

讃岐円座

ところで大光明寺長老が讃岐国産の円座十枚を献上してきた。思いがけない芳志で、うれしかった。

上皇御所の台所別当も摘発される

九日、雨が降った。上皇御所女房のことがいろいろと噂になっている。なんと世安が密通したのは、台所別当という下女であった。この台所別当は比叡山延暦寺の僧である樹下の娘だそうだ。ただし関係を持ったのは世安一人ではないらしい。台所別当を尋問したところ、自白したそうだ。関係を持ったのは、松木宗量中納言入道や橘知興治部卿だという。橘知興はすぐに逃げ出した。台所別当も逃げ出したが、見つけ出されて父親の樹下に預けられたそうだ。大納言典侍も同様なのは、勿論だろう。

上皇御所中が乱倫な男女関係にあった

上皇様近くに仕える公卿や殿上人も起請文を書かされたようだ。上皇御所中で女性関係が乱倫になっていたようで、言語道断な次第である。希に見る不思議な事態といえよう。

貞成、夢の中で連歌を詠む

十日、雨が降った。今日の明け方、夢を見た。その夢の中で、連歌を詠もうと思い立った。賀茂祭の心持ちで、私が第一句を詠んだ。

日のめくる　南になびく　葵かな

第二句が付けられないうちに、夢から覚めてしまった。「葵傾く日影」がこの句の元歌である。この第一句には何も問題がないようだ。なんというめでたい夢であろうか。ということなので、記録しておく。

十二日、晴れていたが、夜に入って大雨が降った。行豊朝臣が来て、世間話をしてくれた。例の上皇御所女房の乱倫の件で、上皇御所に仕えている女房たち全員に対して調査がおこなわれたそうだ。

後小松上皇、近習の公家を御所に軟禁する

それに伴って、公卿や殿上人がほぼ十人ずつ組になって、起請文を書かされたそうだ。そして三日間、上皇御所の殿上に軟禁されて、起請文に背いた徴候が現れないかどうか見守られたそうだ。

起請の失に九ヶ条あり

四辻季保参議兼中将が起請文の写しを持参したところ、写しを持ってきたことじたいが悪い徴候だとみなされて、四辻をすぐに室内へ押し込めなさったそうだ。この件で室町殿がお取り成しなさって、「起請文の悪い徴候については、九ヶ条の決まりがあります。この写し程度のことは四辻の単なる思い違いでしょうから、悪い徴候とすることはできないと存じます」と上皇様を宥め申し上げた。それで上皇様は四辻をお許しになったそうだ。

称光天皇、母の日野西資子への起請文免除を歎願する

このように男どもには起請文を書かせた。それでまた御所の女性たちにも起請文を書かせるそうだ。ただし日野西資子二位殿ばかりは起請文を免除なさるように、称光天皇陛下が上皇様へ歎願なさったそうだ。それでも上皇様は起請文を書かせると仰った。しかし陛下が再三申し

上げられたので、免除なさったそうだ。

上皇御所の殿上では昼夜男どもが慌てて詰めかけていて、とても慌ただしい様子だという。前代未聞のことであろう。

十三日、晴。来たる十五日は、故明尭禅門庭田経有殿の十三回忌である。息子・娘たちと重有朝臣らが仏事を執行するそうだ。今日まず庭田家で仏事があった。菩提院主尊性房や俗人の田向前参議ら、それに村の男どもが大勢招待されたそうだ。

庭田経有には私も特に世話になったので、型通りの寸志を送った。私の妻の二条殿は、蔵光庵で仏事を執行した。

十四日、晴。今日は田向家で庭田経有の仏事があった。これは、田向経良の妻である芝殿が主催したそうだ。即成院その他の尼たちや俗人の男女も大勢招待された。二条殿も招待された。明尭禅門の子孫は二十五～六人おり、曾孫まであわせると四十人余りになるそうだ。子孫繁盛でめでたいことである。

庭田経有の十三回忌

十五日、晴。今日は明尭の祥月命日である。庭田家で仏事があった。即成院その他の僧たちや宝厳院主・蒼玉庵主ら大勢が招待されたそうだ。重有朝臣は困窮を顧みず、仏事をほとんど省略することなく執り行った。忠孝の至りであり、きっと故人（※）も感動して喜んでいることであろう。

ところで例の上皇御所の件だが、外様（とざま）の小番衆や殿上人の楽人も皆、起請文を書かされたそうだ。西大路隆富朝臣も外様の小番衆だ。彼もこの人数に加えられて、起請文を書かされたという。無実ではあっても、慌てているそうだ。かわいそうなことである。

坂本智恩寺主が死んだ

ところでただ今聞いたところでは、坂本智恩寺殿が去る十三日に亡くなっていたそうだ。坂本智恩寺殿は崇光上皇の皇女で、御母は治部卿であった。今月四日よりご病気となっていた。医師は中風（ちゅうふう）だと言っていたそうだ。とても驚いた。

※「故人」…底本では「幽霊」とある。

十六日、晴。斎日（いみび）なので、いつものように身を浄めた。恒例の即成院念仏会に参列した。

ところで例の上皇御所の件で、上皇様近くにお仕えする三番衆四十人余りがすでに起請文を書いたそうだ。それでもまだ上皇様の激しいお怒りは収まらない。近臣の一番衆がなお怪しいということで、起請文を返却して、さらにまた別の起請文を書かせたそうだ。今回は七日間殿上に軟禁して、起請文の悪い徴候が現れないかどうか見守られるそうだ。およそ外様の老人や若者全員に起請文を書くようにご命令されたそうだ。

二十日、晴。田向前参議が京に出かけ、すぐに帰ってきた。入江殿に行って、娘の御稚児と会ってきたそうだ。お酒が出され、円修御房とも対面していろいろと話をしてきたという。

上皇御所女房の乱倫について、近臣の一番衆の起請文を返して、また新たな起請文を書かせた。その後三日間上皇御所殿上に軟禁したが、特に悪い徴候も見られなかったので、それ以後の軟禁を中止なさったそうだ。

大納言典侍密通発覚の契機

大納言典侍は実家の甘露寺家に預け置かれているそうだ。この大納言典侍の姉は、日野西資子二位殿にお仕えしていた。その姉も甘露寺

家の侍と密通していた。上皇御所から実家下がりの時に、二人は会っていたそうだ。そのことが明らかになり、この侍を逮捕しようとしたところ、大納言典侍の姉と共に逃げてしまった。この事が契機となって、大納言典侍の好色な振る舞いも明らかになったそうだ。

台所別当密通の背景

台所別当の局親（つぼねおや）である小兵衛督も上皇様の怒りに触れて、自宅謹慎しているそうだ。台所別当が局子（つぼねこ）なので、それに縁坐して罪に問われたという。この小兵衛督は土岐宮内少輔の娘である。その関係で土岐世安と知り合いになり、台所別当も密通したらしい。

二十五日、晴。毎月恒例の連歌会、いつものように善基・禅啓の二人が今月の当番幹事として準備した。会衆もいつもの面々で、これまたいつものように一献の酒宴から始めた。

二十六日、雨が時々降った。いつものように風呂に入った。法安寺に参詣した。恒例の仁王経御祈祷会に参列した。

田向・庭田両家の裏薮に現れた猪・鹿を村人たちが射殺する

二十七日、雨が降った。早朝、田向・庭田両家の裏薮に猪や鹿が現れた。大勢の村人たちが集まって狩りとなり、弓矢で射殺したそうだ。

雨が降って暇なので、双六の総当たり戦（※）をした。私・宮家の女性たち・田向前参議・重有・長資朝臣が参加した。重有朝臣が勝った。負け業として、すぐに酒宴を開いた。

※「総当たり戦」…底本では「廻り打ち」（廻打）とある。

鳴滝殿住職が亡くなる

二十八日、晴。祐誉僧都が書状で知らせてきたことには、鳴滝殿住職が昨日の午後三時にお亡くなりになったそうだ。この住職は、萩原殿直仁親王前皇太子の娘である。去年から中風と脚気を患っていたが、最近、それが悪化して遂にご逝去となった。少なからず驚いた。享年六十歳だそうだ。

今月初め、御書状で、老病で快癒の見込みなく心細いことだとお嘆きになっていた。それで私に歌合などを下さった。そのお手紙の名残もあって、少なからず悲しい。兄の娘十四歳が鳴滝殿に入ってから、七年になる。ご住職を相続するのに猶予がなくなったといえよう。

六月一日、晴。「すべての事において、とても幸せだ」と予祝した。いつものように月始めのお祝いをした。

ところで長資朝臣が広橋から来るように言われたので、京へ出かけた。上皇御所に仕える女性の件だが、最近、この騒ぎは収まっていた。しかしまた、再燃したそうだ。

朝廷や上皇御所の外様の小番衆や楽人たち全員に、起請文を書かせるそうだ。長資朝臣は朝廷の小番衆である。忙しくて去年から小番には出ていない。しかし小番衆の人数のうちに加えられて、起請文を書くように言われるようだ。西大路隆富朝臣は昨日、起請文を書いて提出した。世尊寺行豊朝臣も広橋を通して同じように命令されたという。

四日、雨が降った。長資朝臣が帰ってきて言うことには、起請文を一昨日書いたそうだ。その後に起請文の悪い徴候を検出するため上皇御所に軟禁されることについては、よろしくないことであり、不吉でもあるので止めるとのご命令だったという。それで誰も今度は上皇御所にいない。

四辻季保参議兼中将がこの件の事務取扱役なので、起請文は四辻卿に渡したそうだ。人々が出した起請文は上皇御所には持ち込まれることなく、四辻の屋敷に留め置かれているそうだ。起請文を書いた人々は、たとえ当番の日であっても上皇御所に来てはいけないという。

洞院満季内大臣と徳大寺実盛大納言は上皇様の覚えもめでたくないので（※）、起請文提出を命じる気にもならないと上皇様が室町殿へ仰ったそうだ。しかし洞院や徳大寺の考えをお許しにならないので（※）、徳大寺は命令がなくても自ら進んで起請文を書いて提出したらしい。洞院も徳大寺と同様にしたようだ。

綾小路信俊卿は年老いているので起請文の提出は免除されるだろうと思われたが、広橋から出頭するように連絡があったそうだ。綾小路もきっと起請文を書かされたのであろう。清華家（※）や年寄などからも全員もらさず起請文をとるようだ。希に見る不思議な処置である。

起請文に書かれた内容は「右衛門佐局には接触しません。総じて今後も朝廷や上皇御所の女房たち・女官・官人らを犯しません。その中で以前女官などを犯した者は、今後、その女官を犯しません」というものらしい。

それに加えてなお、既にまた数人の子どもを産ませた者は、朝廷や上皇御所の臣下から排除するという注も付いているそうだ。松木宗量中納言入道の所業が明らかになり、この注に該当する人物となったので、逃亡したそうだ。子どもの松木宗継卿も縁坐（えんざ）で同罪とされたので、門を閉じて自宅謹慎している。中山有親朝臣は僧となって地方に下ったという。橘知興朝臣も逃亡して行方不明となっている。

上皇御所や朝廷の女性たちも皆、起請文を書かされたそうだ。ただし天皇陛下の母である日野西資子二位殿と三条公光太政大臣の娘である上臈の二人は書かなかった。二位殿は天皇陛下がお取り成ししたので、書かずに済んだ。二位殿の妹廊御方も陛下がお取り成しになったが、上皇様はお許しにならず、起請文を書かせたという。上臈は室町殿のお手が少し懸かっているので、起請文を書く対象から除かれたそうだ。それ以外の女性たちは全員、起請文を書かされたようだ。

足利義持の対応

室町殿は毎日上皇御所へ行かれて、大々的な酒宴をお開きになっていたそうだ。その御内心は、疑いのある人々を深く酔わせて、もし起請文に背く悪い徴候がでたら罪科に処するおつもりらしかった。それで、このように大宴会を企画なさったという。人々はとても怖がったそうだ。なんとも前代未聞の不思議な処置である。その一方で、これは見せしめの処置であろうという人もいる（※）。

上皇様もこのところ、御修法をなさっている。これも犯人をあぶりだすためのお祈りであろうか。

【頭書】（＝日記の上方の隙間に書き加えた記事）後で聞いたことだが、綾小路信俊前参議は起請文を書いたそうだ。こんな年寄に起請文を書かせるというのは、かえって面白いことかもしれない。洞院内大臣もやはり起請文を書いて提出したそうだ。

※「上皇様の覚えもめでたくないので」…底本には途中に「後記のためにも」とあるが、未詳。

※「しかし洞院や徳大寺の考えをお許しにならないので」…底本では「然れども」の後に「彼所存不許之間」とある。「かの所存を許さざるのあいだ」と読めば、「洞院や徳大寺の考えをお許しにならないので」となるが、許すに被などの敬語がない点が難点。また「かの所存ばかりならざるのあいだ」と読めば、「そのような上皇様のお考えばかりではないので」となるが、所存に御などの敬語が付いておらず、また許すを動詞として読めるかどうかの点も難点。

※清華家（せいがけ）…最上位の摂家に次ぎ、大臣家より上位の公家の家格。大臣・大将を兼ねて太政大臣になることのできる七家（久我・三条・西園寺・徳大寺・花山院・大炊御門・今出川）を指す。

※「その一方で、これは見せしめの処置であろうという人もいる」…底本では「かつは標示かと云々」とある。

播磨国飾磨津別符

五日、晴。鹿王院の使者の僧・主事宗監主が来た。播磨国飾磨津別符を以前のように鹿王院にお返し下さいと言ってきた。返事は後でこちらからお出しすると返答しておいた。

足利義持、遅刻者を厳罰に処す

聞くところによると、室町殿が上皇御所に行かれたところ、広橋兼宣・日野有光院執権・裏松義資が遅刻したので、自宅謹慎の処分になさったそうだ。このところ、毎日、室町殿は上皇御所へ行かれている。それで誰であろうが遅刻してはいけないと以前からお命じになっていたそうだ。それなのに遅刻したので、自宅謹慎処分になさったようだ。今回の起請文の件にかこつけて、人の越度を無理やりやり玉に挙げて厳しく処分したということであろうか。

七日、晴。いつものように祇園会が行われたそうだ。それで、宮家でも内祭を少し行った。田向前参議以下、善基らが参列した。

八日、晴。重有朝臣を鳴滝へ行かせて、御使者として亡くなったご住職のお見舞いをさせた。そしてすぐに帰ってきた。安芸守久綱が取り次ぎをして、毎年のお寺の様子について話を聞いてきた。亡くなった住職の追善法要費用を捻出する領地一ヶ所を徳光院へ御寄付されたそうだ。その領地からは毎年二十貫文余りの収入が見込めるという。その他の御領地などは私の娘である御稚児がご相続するそうだ。

その後、重有朝臣は冷泉正永の屋敷に立ち寄ったが、冷泉永基朝臣は上皇御所へ出仕しており留守だった。それで正永と雑談してきたそうだ。

大納言典侍の密通相手は橘知興

上皇御所の女性問題、大納言典侍殿は橘知興朝臣と密通したことが明らかとなった。それで知興は本鳥を切り逃亡したそうだ。

右衛門佐は有親朝臣・土岐世安・院召次の幸末佐と密通した

同じく上皇御所女房の右衛門佐は、妊娠こそしていなかったものの、去る五月二十九日にただ逃げ出したそうだ。この女房が有親朝臣や土岐世安と密通したのは勿論のことである。

後小松上皇は寵愛する幸末佐を処罰せず

上皇御所の下級職員である幸末佐も右衛門佐と密通していた。しかし後小松上皇様は幸末佐を寵愛しているので、この件は知らぬ振りをして、幸末佐にはお咎めがなかった。

国母の日野西資子もかつては中御門宗量と密通していた

中御門宗量中納言入道は現在、上皇御所の女性と密通していない。しかし以前、上皇御所へ親しく出入りしている折に、称光天皇の母である日野西資子二位殿と密通していた。そのことが今回明らかになったので、中御門宗量を流罪に処することになった。そのことを内々に知った中御門はすぐに逃亡したそうだ。二位殿としては非常識な行いであり、不名誉なことといえよう。

ところで室町殿が先日上皇御所へ行かれた折、広橋兼宣一位大納言らが庭でうずくまって室町殿に拝礼した。これはよろしくないことで、今後はしないようにと室町殿が仰ったそうだ。

また朝廷の近臣らが室町殿御所へ何度もやって来るのもよろしくない。今後は呼ばれた時以外は御所に来てはいけないとお決めになったそうだ。このことの事務取扱者は高倉永藤卿だという。広橋らも呼ばれた時以外に御所へは行かない旨の復命書を提出するように命じられた。それで面々が復命書を提出したそうだ。

このようなことを重有朝臣は冷泉正永からいろいろと聞いてきた。不思議なことばかりである。

九日、晴。上皇御所で観音懺法の法会が行われた。導師は相国寺長老。同伴の僧衆は十人で、相国寺内で声の良い者を選んだそうだ。上皇様は観

音懺法に参列なさったことがないと仰ったので、室町殿がこの法会を用意なさったそうだ。

用健がいらっしゃった。鹿苑院主から書状が来たそうだ。相談したいことがあるので、急いで鹿苑院へ来てほしいとの連絡だったそうだ。いったい何ごとなのであろうか。いつものように風呂に入った。

光厳上皇の山国御庵

十日、晴。用健が京へ出て、すぐにお帰りになった。鹿苑院へ行ったところ、光厳上皇の山国御庵を御管理してほしいとのお話だったそうだ。去年、用健が山国御庵管理の希望を出していたが、他にも方々から希望が殺到し、庵主が既に決まったと言われていた。ところがまたこのようなお話がなされた。めでたいことである。

勧修寺門主が他界した

十一日、晴れていたが、夕方、にわか雨が降った。勧修寺門主が他界したと伝え聞いた。それで、塔頭御寮恵芳がこの勧修寺御比丘尼をお見舞いするため、京都に出かけられた。そして夕方には帰ってきた。

門主がお亡くなりになったのは先月二十七日の事だったそうだ。体力が衰弱しており、この数日のうちの死を覚悟していたそうだ。それで遺産についてすべて取り決めておいて、二十七日の日暮れ、正座で合掌しながら、大往生したそうだ。

塔頭御寮恵芳は勧修寺御比丘尼と姉妹で、いろいろと頼りにしていたので、悲しみや歎きは言葉に言い尽くせない程だという。常磐井入道親王の悲歎も比べようがないほど大きいそうだ。入道親王は門主のお弟子であり弟でもあるという。

ところで明日は行蔵庵の前庵主である明見庵主の三十三回忌である。同庵の寿蔵主や珠侍者は、法事の準備に余念がないそうだ。夕方に珠侍者が軽食や茶菓子などを持参して来た。御初最（※）を特に進上するとのことだった。思いがけないことで、すぐに味わった。

※「初最」…未詳。

行蔵庵前庵主明見の三十三回忌

十二日、晴。行蔵庵の仏事に、南禅寺前住職の無外和尚や相国寺前住職の海門和尚、その他大勢の僧が招かれた。大規模な仏事である。伏見荘近辺の寺庵も、同じく仏事に入ったそうだ。

琵琶法師の椿一検校は伏見荘出身で平家語りの名人

琵琶法師の椿一検校は、この仏事の座敷に呼ばれて、平家物語を語ったそうだ。椿一はこのところ嵯峨野で寄付集めの平家語りをしていたが、この仏事のために呼ばれてきたそうだ。

この五～六年、椿一は伏見荘に来ていなかった。この検校は、もともと伏見荘の住人である。故郷を忘れて何年もやってこないのは、無礼であろう。それに、仏事のついでに宮家へ立ち寄らず、すぐに帰っていったそうだ。奇怪な行いだ。椿一は現在では平家語りに堪能な名人である。

十四日、昼に夕立が降った。祇園会が盛大に行われたそうだ。祭礼の行列が朝廷に立ち寄る時分、にわか雨が降ったそうだ。それで風流笠などが散々に濡れてしまい、多大の損傷を受けたという。

山国御庵の件、続報

用健が来られた。山国御庵のこと、まず鹿苑院主と調整した後、室町殿のご機嫌の良いときにお伺いを立てるそうだ。徳光院主とも相談して、徳光院から用健を後見する僧を派遣してくれるそうだ。まずは山国御庵を用健が管理することになって喜ばしい。ただ室町殿のご意向はまだ分からないので、確定したわけではない。

石清水八幡宮で早鐘が鳴る

ところで昼頃に石清水八幡宮で早鐘が鳴った。神人たちが訴訟しているのであろうか。不審である。

石清水八幡宮神人たちが薬師堂に閉籠する

十五日、晴。石清水八幡宮の早鐘は、神人たちが訴訟して薬師堂に立て籠

もっているためらしい。もし訴訟が叶わなければ、薬師堂に放火すると言っているそうだ。神人たちは神社を管理している社務に訴えているようだ。

細川満久の屋敷に怪鳥が現れる

ところで細川満久讃岐守の屋敷に怪しい鳥が出現したそうだ。いろいろな形になる鳥らしい。縁の下から引っ張り出してこの鳥を見たら、細川讃岐守が病気になったそうだ。本当の話かどうかは分からない。

十六日、晴。石清水八幡宮の早鐘は今も絶えず鳴らされている。神人に限らず、郷民どもも神人の味方をしているそうだ。大勢が薬師堂に陣取って、立て籠もっているようだ。

十七日、晴。坂本智恩寺殿が亡くなって軽い喪に服していたが、今日、その喪が明けた。賀茂在方朝臣が祓い呪具を献上してきた。

播磨国飾磨津別符を返すように鹿王院が催促する

ところで播磨国飾磨津別符を返すようにとの催促状が鹿王院から届いた。しかし妙法院殿のお口添え（※）を無視することはできないので、鹿王院へ返付することは難しいと返事をしておいた。

子が親にお酒やお餅を献上するという慣習

ところで子が親にお酒やお餅を献上するという慣習のことが古典籍などに書かれている。それで我が息子が私にお酒やお餅を用意してくれた。うれしかった。

※「妙法院殿のお口添え」…飾磨津別符は妙法院の口添えで、宮家が本照院に支配させたという経緯がある。応永三十年（一四二三）三月二十四日・九月二日条を参照のこと。

十九日、晴。石清水八幡宮神人の訴訟は十三ヶ条に及ぶものだそうだ。そのなかで、八幡宮を総括する役である社務を交替させろとも主張しているようだ。幕府としては社務を交替させることだけは断固として認めない、しかし、それ以外の要求項目は認めようと応えている。一方、神人たちは、社務が交替しなければ、それ以外の要求項目も結局は実行されないので、幕府案は飲めないと強硬に言い張っているそうだ。

守護大名の軍勢と石清水八幡宮神人たちが対陣する

それで幕府は諸大名の軍勢を派遣して、八幡宮を守らせた。一方、薬師堂はまったく敵である神人の陣地となってしまっている。そして神人たちは薬師堂に放火する用意をしているようだ。国家的な重大事に驚き入るばかりである。

夕方、即成院善基が来て御酒宴の用意をしてくれた。その後、惣得庵主や明元たちも小さな酒樽を持参して来た。それで酒宴となった。

二十二日、夕方、にわか雨が降り、雷が鳴った。田向前参議が勧修寺門跡へ行った。故尊興門主をお見舞いする御使者として出かけたのである。同じく御比丘尼の庵にも行き、しばらくして帰ってきた。

勧修寺門跡で取り次ぎ役をしてくれたのは、耕雲和尚の子息である浄土寺法印だったそうだ。お返事をこまごまと返してきたという。

次に田向前参議は御比丘尼の庵に行き、お酒を出されるなど饗応に預かったそうだ。数日前、内親王に任命されることを望んで、室町殿が後小松上皇様に取り次ぎなさったそうだ。しかし上皇様のご意向としてはそれを許可なさらなかった。三代の間親王になっていないので、内親王にはできないと仰ったという。それで今度は准后の称号を重ねて申請したら、これは許可されたそうだ。

奈良で大規模な喧嘩があったとの噂が流れる

ところで最近、奈良で喧嘩があったそうだ。このまえの南都祇園会の際、田舎者が酔っ払ってつまらない事をした。それを美女の娼婦が見て笑った。それでその田舎者はその美女とその娼館の主人である娼婦らを殺害して、自分も切腹したそうだ。そのため、この田舎者の味方が大勢奈良に攻め込んできた。それにたいして奈良の民衆たちが防戦し、双方に大勢の死者がでたそうだ。ただしこれは噂であり、実際のところは不

明だ。

後に聞いた話では、興福寺と東大寺双方の信者が対立して、三日間合戦となったという。それで双方に大勢の死者が出たそうだ。

二十三日、晴。鳴滝殿へお茶菓子代として銭二貫文を送った。これは亡くなったご住職へのお見舞いであり、姪の鳴滝御稚児御所へ志を示したものである。

男山が震動する

さて石清水八幡宮のことだが、神人たちはなお反抗を続けている。昨日のにわか雨の後、石清水八幡宮の御神輿（※）を取り上げて、薬師堂の上に振り上げたそうだ。その時、八幡宮がある男山が震動したという。その他にも、薬師堂内にある本尊などの仏像を取り出して、お堂の柱に逆さまに縛りつけ、敵を降伏させるような祈祷をしたらしい。

神人が霊夢を見る

神人たちは訴訟が叶わなければ薬師堂を放火するために、大松明を御堂の軒に立て並べているそうだ。ある神人が白蛇四匹が揃って薬師堂に入るという夢を見たという。これは神人たちを神が擁護している奇瑞ではないかと言われているそうだ。

後小松上皇は社務の田中を贔負にしている

これらのことは石清水八幡宮からただ今来たばかりの人が言っていることだから、本当の事だ。社務の田中をご贔屓にしているので、社務を交替させるのは許さないと上皇様は仰っているそうだ。

北野天満宮の鳴動と光り物の飛行

また聞いた話によると、やはり昨日のにわか雨の時分に北野天満宮の社殿が鳴動した。その後、光る物が現れて、南を指して飛んで行ったそうだ。天神の御霊が石清水八幡宮へお飛びになったのではないかと言われているようだ。

※「御神輿」…底本では「社壇」とある。

退蔵庵の庭が掘り崩される

二十四日、晴。夕方、退蔵庵に行った。田向前参議・重有・長資朝臣らも行った。しばし納涼していた。院主が来て、雑談した。退蔵庵の中島や釣殿、それに橋なども壊されていた。中島の松や石なども皆掘り取られていた。室町殿のご命令で、このような状態になったそうだ。無念極まりない。松や石などは常徳院へ持って行かれたそうだ。

退蔵庵の庭石は伏見御所跡の石

退蔵庵の庭石は伏見御所跡の石だった。それが他所へ取られていくのは無念なので、少しお返し下さいと院主に申し入れた。そうしたら院主は、全部持って行かれる前に急いでお取り下さいと仰った（※）。

新築の塔頭に足利義満の御影が安置された

新築の塔頭をはじめて見た。この春、新築が完了したものである。きれいだった。鹿苑院足利義満殿の肖像画や国師の肖像画などが安置されており、内装の飾りもすばらしかった。しばらくして帰った。

※「急いでお取り下さいと仰った」…底本では「急可被召之間被申」とあるが、「間」は「旨」の誤記であろう。

二十五日、晴。退蔵庵の石を五つ、取り寄せた。

大光明寺の風呂に入った。まず指月庵に行き、しばらく納涼した。その後、沐浴した。そして塔頭大通院に行き、院主の用健と雑談した。院主の部屋から干し飯や瓜が出されたので、味わった。田向前参議・重有・長資朝臣・慶寿丸・寿蔵主・梵祐らも同席した。

ところで聞いたところによると、守護大名の一色・山名・土岐・赤松・佐々木・京極の六頭が石清水八幡宮社頭を警護しているそうだ。男山の山上も麓も大軍勢が充満している。

昨日の石清水八幡宮騒動

昨日は神人たちを退治するため、諸陣営から大軍勢が攻め寄せ、神人たちは薬師堂に放火しようとした。それで仕方なく合戦は中止となっ

た。しばらくにらみ合いとなっていたが、そこに幕府から御使者が命令を伝えて、諸陣営の軍勢はとりあえず退却したそうだ。山上も麓も大騒動で、どうしようもない有り様だったそうだ。巫女が物狂いとなって、いろいろと託宣を口走ったようだ。

足利義持は薬師堂焼失も辞さず

夜にまた聞いたところによると、今日の夕方、赤松大夫の大軍勢が下ってきたそうだ。その他諸大名の軍勢どももなお現地に向かっているようだ。

今日の日中、室町殿の御所へ諸大名が集まり、御前会議をしたところ、結果的に薬師堂が焼失したとしても、痛くも痒くもない。ただ神人どもを責め殺せと室町殿がご命令になった。それに、神人の家など麓の家々もすべて焼き払えというご命令もあったという。それで、大軍勢が重ねて現地に向かっているそうだ。

室町殿の御内心は、薬師堂を焼失したとしてもまた造営すれば、何の問題もないだろう。社務を交替させないと上皇様が堅く仰っている以上、どうだろうと交替させるわけにはいかないということらしい。

延暦寺根本中堂の常灯と石清水八幡宮薬師堂の常灯

比叡山延暦寺から訴えがあった。石清水八幡宮薬師堂の常灯は草創以来、火を消したことはない。比叡山根本中堂の常灯が消えた時、石清水八幡宮薬師堂常灯の火を取ってきて、根本中堂の常灯に渡して火を灯すという。もし薬師堂を焼失させたら、神輿を振り渡して強訴すると延暦寺は言っているそうだ。全国的な重大事であり、驚き歎くこと極まりない。

二十六日、晴。毎月恒例の連歌会、今月は祐誉僧都が当番の幹事で、いつものように準備してくれた。会衆もいつもの面々である。

石清水八幡宮が炎上する

連歌会懐紙一枚目の時、午後一時ごろ、石清水八幡宮から火が出ていた。びっくりして近くに寄って、様子を見た。男山の山上と麓の三ヶ所から煙が立ち上っている。麓は特に夥しく炎上している。八幡宮の境内や薬師堂は無事のようだ。それでひとまず安心したので、連歌会をまた始めた。

神人たちは石弓で防戦する

その後、聞いたところによると、京都市内が騒がしくなり、諸大名が甲冑を着て石清水八幡宮へ急行し、社内が動揺したそうだ。さらに夕方聞いた話によると、一色の軍勢が薬師堂の近くまで攻め上ってきたので、神人たちが防戦した。神人が石弓を切り落として、一色軍の藤田が殺されたそうだ。三方山城入道の弟らしい三方次郎も同じく石弓で打ち殺されたそうだ。彼らは、まだずいぶん若い兵士たちらしい。その他、怪我をした者は六～七人いたようだ。一方、神人の方にも怪我人が出たが、死人はいないそうだ。

神人の在家が自焼する

薬師堂裏の岩屋堂に神人たちが立て籠もっていた。それで一色軍が岩屋堂から神人たちを追い出した。神人たちは逃げ出す際に岩屋堂に放火した。それが兼ねてからの合図だったらしい。麓の神人たちの妻子が自分たちの家に火を懸けた。それで、神人の家などが数多く炎上したそうだ。境内の護国寺や社務以下の坊舎は皆、無事だった。まずはめでたいことである。

それにしても八幡宮の社内から火が出たことにはかわりがない。全国的な重大事として、これ以上のことはあるまい。驚き入るものである。

夜に入って、連歌百韻を詠み終わった。

【頭書】佐々木の軍勢でも二人が殺されたそうだ。

二十七日、晴。娘の入江殿御稚児が今日初めて勤行に出られたそうだ。それで娘に祝意を表した。入江殿ではお祝いの儀式があったそうだ。

さて石清水八幡宮が昨日炎上した件だが、混乱のさなか、神人四人が

本殿に立て籠もったそうだ。

神託の巫女を拷問する

また神託をした巫女を社務の坊舎へ呼び入れて実否を問い質したところ、全く覚えていないと答えたそうだ。この巫女は神人の妻だという。それで大変な力持ちの社務の従者がいろいろと巫女を拷問した。しかし、それでもはっきりとは答えなかったそうだ。

巫女を拷問した若党が溺死する

その後、この従者が京都へ出かけた際、鳥羽で急に眠気に襲われた。それで淀川の川岸で休んでいたところ、河の中に眠り落ちて、流れ死にしたそうだ。巫女を拷問にかけた神罰だと言われているそうだ。不思議なことである。これらのことはすべて、実際にあったことだ。

石清水八幡宮神人への水責め

二十八日、豪雨が降った。幕府は、石清水八幡宮神人への水の供給を断つ作戦に出た。水攻めだという。ところが、豪雨が降った。この雨は水を断たれた神人たちにしてみれば、神がお助けしてくれた雨といえようか。

斯波義淳勘解由小路左兵衛佐と畠山某の大名二頭がさらに現場に向かったそうだ。これまでの大名六頭がさらに八頭になったということになろう。

二十九日、晴。綾小路信俊前参議が来た。年々勤仕しており、良い例となっている六月祓えの役をしに来たのである。いつものように風呂に入った。浴室で綾小路前参議が一献の酒宴を開いてくれた。面白かった。

夜になって、いつものようにお祓いの儀式をした。綾小路前参議がお祓いの役をしてくれた。その後、恒例の酒宴をした。これも綾小路が準備してくれた。酒宴が度重なった。田向前参議・重有・長資朝臣らも参加した。酔っ払ったので、音楽会はしなかった。

七月一日、晴。「秋の初めの朔日で、めでたい兆しがあり、すべての事においてとても幸せだ」と予祝した。いつものように月始めのお祝いをした。綾小路・田向二人の前参議らもお祝いに参加した。

一献の酒宴が終わって永松庵に行った。二人の前参議・重有・長資ら朝臣を連れて行った。前庭の草花を一覧した。玄超がお酒を用意してくれた。面白かった。

その後、行蔵庵に行った。庵が修理されてから始めて見に来た。珠侍者は留守だった。次に蔵光庵に行った。前庭の石などを取り壊して掃除してあった。院主と雑談して、しばらくしてから帰った。

その後、音楽会をした。平調の万歳楽・三台破・三台急・甘州・春揚柳・五常楽急・勇勝急・太平楽急・鶏徳・林歌、それに朗詠をした。綾小路前参議・長資朝臣・慶寿丸と合奏した。

石清水八幡宮社務が改替されるとの情報が流れる

ところで石清水八幡宮社務の田中融清が交替させられたそうだ。しかしそれでも神人たちは本殿に立て籠もっている。新任の社務が出仕するのを見届けてから、退散するつもりらしい。早鐘は撞かれなくなった。これでなんとか神人たちは安心するだろう。日本の国としても、いずれにせよ、めでたい、めでたい。

二日、晴。音楽会をした。採桑老・蘇合三帖・蘇合三帖急・万秋楽破・白柱・輪台・青海波・千秋楽と朗詠をした。次に舞のある万歳楽・長保楽・陵王・落蹲を演奏した。綾小路前参議・田向前参議は太鼓、長資朝臣は右楽の時に鉦鼓、それに琵琶の慶寿丸らが合奏した。

七夕に奉納するため、短冊を出して面々に配った。恒例の草花も面々に進上するよう命じた。

足利義持が石清水八幡宮現社務の改替を猶予している

三日、晴。石清水八幡宮社務が交替することは、いまだ定まっていないようだ。現社務の田中が醍醐寺三宝院主満済を通して幕府に働きかけているらしい。全国的な大事件となったので、社務を辞退したいと田中は幕

府に申し入れている。ところが考えがあると仰って、室町殿は社務の交替をお許しにならないという。擅という者を社務に任命するおつもりらしいが、今のところ決定していないようだ。

音楽会をした。舞のある甘州・林歌・抜頭・新靺鞨を演奏した。綾小路前参議・田向前参議・長資朝臣らが合奏した。その後、少し酒宴をした。綾小路前参議がこの酒宴を用意してくれた。度々一献の酒宴を開いてくれて、綾小路には痛み入るばかりである。

綾小路信俊に朗詠を習う

夜に綾小路前参議を呼び入れて、雞人唱暁（※）という朗詠を習った。長資朝臣も一緒にこの朗詠を習った。

※雞人唱暁…『和漢朗詠集』禁中五二四「鶏人暁唱」。

四日、晴。音楽会をした。太食調の打毬楽・道行・太平楽破・太平楽急・傾盃楽・抜頭・長慶子と朗詠をした。綾小路信俊前参議ただ一人が合奏してくれた。夕方に少し酒を飲んだ。

五日、晴。早朝に音楽会をした。壱越調の回盃楽・春鶯囀・颯踏入破・鳥急・賀殿破・賀殿急・北庭楽・陵王破と朗詠をした。音楽会が終わって、綾小路前参議は帰っていった。

綾小路は当初、七夕まで伏見宮家にお仕えすると言っていた。しかし上皇御所の七夕音楽会に参加することになったので、急ぎ戻ることになったという。残念だ。

六日、晴。七夕の草花などを取り集めた。座敷などを飾った。

七夕で梶の葉に和歌を書いて奉納する

七日、晴れていたが、夕方、にわか雨が降った。朝早くいつものように梶の葉に和歌を書いた。草花を面々が進上してきた。その面々は次の通りである。

花を奉納した面々

田向前参議は花瓶一つとお盆・重有朝臣は花瓶一つと香台・長資朝臣は花瓶一つとお盆・慶寿丸も花瓶一つとお盆・寿蔵主は花瓶一つ・梵祐も花瓶一つ・善基も花瓶一つ・法安寺からも花瓶一つ・光台寺は花瓶一つとお盆・松林庵も花瓶一つとお盆・行光は花瓶一つと香台・禅啓は花瓶一つとお盆・有善も花瓶一つとお盆、そして宝泉は花瓶二つと堆朱（※）のお盆二枚、それに中国風の絵など中国製品各種をそれぞれ進上してきた。その目録は別紙に記載した。

座敷に屏風を二双立てた。その他、机を立てて花瓶数瓶をその上に置いた。型通りに花を飾った。今日は毎月恒例の連歌会で、今月の当番幹事である西大路隆富朝臣と世尊寺行豊朝臣が来た。今日のために前もって呼んでおいたのである。

連歌会に先立って大光明寺へ行き、いつものように焼香した。寺から帰って風呂に入った。その後、連歌会を始めた。会衆は田向前参議・重有朝臣・長資朝臣・行豊朝臣・隆富朝臣・慶寿丸・善基・梵祐・行光・禅啓・康友らである。一献の酒宴の際に、七夕の御節供にも同じくお供えをした。三献の酒宴が済んだ際に隆富朝臣は出ていった。急用があると言って、早退したのである。午後九時に百韻を詠み終わった。

七夕の和歌短冊を取り集めていたが、披露することができず、残念だった。和歌を詠んでくれた人々は、行豊朝臣・今回初めて詠んだ隆富朝臣・正永で、その他はいつもの面々である。

すべての行事が無事に終わった。その後、私一人で琵琶を弾いた。盤渉調の曲を七つ、七夕に奉納した。

※「堆朱」…底本では「堆紅」とある。

八日、晴れていたが、朝夕ににわか雨が降った。昨日と同じように座敷に花を飾っておいた。惣得庵主と明玄らが来た。花を見せてあげようと思い、私が呼んだのである。酒を飲んだ。田向前参議以下、寿蔵主らも一緒に飲んだ。行豊朝臣が帰っていった。

御牛飼い虎石丸の息子

亡くなった牛飼いの虎石入道の子息が来た。御所に恩顧の牛飼いであった父虎石の跡を継いで、御所に奉公したいと言ってきた。長資朝臣が取り次いだ。故虎石丸は昔から御所に仕えていていたので、今に到るまで情けをかけてきた。いま現在、宮家として御牛飼いは無用であるが、なにかしら御用ができた時は呼びだして召し使ってやろうと声をかけた。だから引き続いて御牛飼いとして継続して雇用することはできないと言い含めた。酒を飲ませて、帰らせた。

管領畠山満家の軍勢が石清水八幡宮に向かう

ところで聞いたところによると、畠山満家管領の軍勢として遊佐・神保・平の三名が石清水八幡宮へ向かったそうだ。

九日、晴。花座敷は昨日と同じままだ。宮家の女性たちや男共が花見の用意をしてくれた。それで花見酒となった。

さて石清水八幡宮の件だが、神人たちがなお訴え続けているので、管領に命じて大軍勢を出させたそうだ。そしで管領が仲介に立って、神人たちといろいろと話し合っているらしい。

十日、晴。花飾りを撤収した。

神人たちは食責め・水責めに耐えられず降参した

十三日、晴。石清水八幡宮の件であるが、管領の説得に応じて、神人たちは降参した。この間の食物や水の供給を遮断する食攻め・水攻めに神人たちは疲れ果て、降参したそうだ。

ただしなお神人たちは立て籠もっている。諸大名の軍勢が撤収した後に神殿から出ると言っているらしい。諸大名としては神人たちがまた境内に立て籠もるのではないかと恐れている。神人がまず退散してから、軍勢を引くと諸大名は言っている。それでお互いに水掛け論となっているようだ。

社務は解任されて、西竹保清が新しく社務に任命された。別当には東竹照清が任命された。西竹と東竹は一族だそうだ。その他、神人が訴えていた五ヶ条も叶えられて、争論は解決した。日本国としておおよそ、めでたいこと極まりない。

廊御方が入江殿に行かれて、夕方帰ってきた。私の娘の御稚児らの面々はいろいろとご馳走も味わっているし、衣装なども整えられており、満足な生活を送っているご様子だそうだ。すべて前世からの良い巡り会わせなのであろう。安心したし、うれしいことだ。

石清水八幡宮の神人たちが神殿から退散した

十四日、昼ににわか雨が降った。石清水八幡宮の神人たちは神殿から退散した。それで幕府の軍勢も退いたそうだ。平和になって、国家としてとても喜ばしいことである。めでたい、めでたい。

いつものように盂蘭盆の儀式を始めた。

蓮供御

十五日、晴れていたが、昼ににわか雨が降った。雷鳴がとどろき、雷も落ちたようで、びっくりした。雨もひどく降った。いつものように蓮御飯をお供えした。

その後、大光明寺へ行った。宮家の女性たちは行かなかった。田向前参議・重有朝臣・長資朝臣・慶寿丸は行った。施餓鬼会に参列した。施餓鬼の時分にもなお雨脚は止まらなかった。僧衆は四十八人だった。参列し終わって、塔頭大通院へ行った。いつものように焼香して水をお供えした。その後、仏殿でも焼香して帰った。雨は夜に入ってあがった。

石井村・船津の念仏拍物と風流

いつものように石井村と船津の念仏囃子物の行列が来た。船津の囃子物と物真似芸は石井村に来てから、宮家に廻ってきたようだ。宮家に来たのは深夜だったので、見物しなかった。

十六日、晴。いつものように即成院の念仏会に参列した。

六条殿絵預秀行の牛の絵

十七日、晴。生島明盛が来て、世間話をしてくれた。牛の絵を一枚持参していた。それは、板切れの両面に牛二頭が描かれたものだった。六条殿（※）絵所預の秀行の筆になるものだそうだ。

牛の絵を逆さに懸ければ、雨が止むという呪い

雨降りの時に牛を逆さに釣れば、雨が上がるそうだ（※）。そのため、絵所に牛の絵を描くよう、兼ねてから命じてあったそうだ。それを持参してくるとは、神妙なことである。

後小松上皇様が詠んだ、七夕連歌会の第一句。

空に見ば　天の押し手ぞ　梶の書

珍しい内容で、かつすばらしい第一句である。

今月二日、室町殿が蜷川信永入道をお連れになって、上皇御所へお出でになった。そこで蜷川は上皇御所の御連歌会にお仕えした。蜷川が第一句を詠んだ。

池水も　木々も千秋の　緑かな

初めての御所参上なので、御太刀一振りと銭百貫文を蜷河は献上した。これはあらかじめ室町殿が蜷川にお下しになったものだそうだ。上皇様からまた御服十着と太刀を蜷川にお与えになった。しかしそれは過分だと室町殿が申されて、蜷川からお取り上げになったそうだ。

蜷川信永

この蜷川信永は、子どもの頃、千若丸と言った。故二条良基摂政の時代に連歌の達人として諸方の連歌会に呼ばれた名人である。今も存命で、年は七十ばかりだそうだ。

※「六条殿」…底本では「当絵所預」とある。生島明盛は応永二十五年（一四一八）一月二十二日に六条殿預（六条殿の領地などの管理者）に任命されている（応永二十五年二月二日条）。従って底本の「当」は六条殿をさすと思われる。六条殿は後白河法皇の仙洞御所で、御所内の持仏堂を長講堂といった。この時期の六条殿はこの長講堂をさす。

※「雨降りの時に牛を逆さに釣れば、雨が上がるそうだ」…牛（うし）を逆さにすると「しう」となる。「しう」は「止雨」に通じるところからきた呪術であろう。

丹波産の瓜

十八日、晴。島田定直六条庁官が丹波国から六条殿へ送られてきた御瓜を献上してきた。この瓜を庁務として六条殿にお供えした後、宮家に持参したのである。神妙なことだ。

後小松上皇に梨と鱸を贈る

十九日、晴。前庭に成った梨一籠と川魚の鱸二匹を上皇様へ差し上げた。このところ何も音信を差し上げていなかったので、ご機嫌伺いとしてお贈りしたのである。すぐにご丁寧なお返事があり、いつものことながらありがたくうれしいことですと詳しいお言葉を下された。恐れ多くもありがたい事である。

前庭の梨の木

今年は珍しく前庭の梨が成った。この梨は三～四年に一度成る木だ。取る時は大勢の人が群れ集まる。こちらが禁止するのを全く意に介さず、梨を取っていく。よろしくないことだ。

播磨国飾磨津別符に関する鹿王院の使節僧

ところで鹿王院の使者の僧（※）が来た。この僧に、用健も同行なさっていた。この僧によると「播磨国飾磨津別符に事務担当者を付けるというご命令が出されたそうですが、とりあえず詳しい事情を本乗院に尋ねたところ、何も知りませんと返答されました。どういう事情なのでしょうか、理解できません」ということだった。

私からは次のように返事をした。「本乗院という点が間違っています。本乗院というのは、岩蔵本乗院ですよね。御領の事務担当者は、岩蔵本乗院ではなくて、本照院です。場所が違います。妙法院殿のご推薦があ

ったので、本照院に飾磨津別符の事務取扱を命じました。いずれにせよ本照院に詳しい事情を報告させます。その後、追って返事します」と返答しておいた。

蔭蔵主松崖が来た。十六日に天龍寺の聚景がご退任されたそうだ。

ところで、夏の修行期間中行っていた音楽の練習は、今日が最終日である。万秋楽をひたすら弾いてきた。この万秋楽の序破急を一通り弾いて妙音天に奉納し、夏の音楽練習を無事終えた。

※「使者の僧」…底本には「使節僧」に「出官」という割注があるが、「出官」の意味は未詳。

二十日、晴。風呂に入ってから、宮家に帰った。激しいにわか雨が降った。

二十一日、晴。いつものように御香宮へ参詣した。

山田宮社人の芝俊阿らが大光明寺境内の大木を切る

二十二日、晴。山田宮の拝殿が破損したので、修理するため大光明寺境内の木を切りたいのですがと、社人の芝俊阿らが大光明寺にお伺いを立てたそうだ。大光明寺からは問題ないとの返事があったという。それで指月庵北門前の斜面（※）の上に生えていた広葉樹（※）四本を切った。

栄仁親王が寺法として大光明寺境内の大木伐採を禁止していた

このことは前住職の徳祥和尚の時に、問題となったことがある。父の大通院と相談して、大光明寺境内の大木を切ってはいけないという寺法をお定めになった。しかし、このことを現住職は知らなかったようで、安易に許可を出してしまったらしい。それで用健や寺官たちが反対して、他の木も切ろうとしている社人たちを押し留めたそうだ。

以前、寺法としてお定めになったことを宮家御所にお伺いを立てなかったのは、よろしくないことだ。今後、大木を切ることは堅く禁止しよう。

※「斜面」…底本には「切岸」（きりぎし）とある。

※「広葉樹」…底本には「堅木」（かたぎ）とある。

二十三日、晴。朝早く塔頭・大通院の院主である用健が来た。山田宮の木のことでご報告があった。

石清水八幡宮安居頭が延期となる

ところで聞いたところによると、石清水八幡宮安居頭が延期になったそうだ。来たる二十五日が期日なので、安居頭人が安居に用いる木を切ろうとしたら、田中前社務と神人たちが対立して両方に死傷者がでたそうだ。不思議なことである。

二十四日、大雨が降ったが、昼には晴れた。神人たちが大軍勢を率いて田中前社務の坊に押し寄せようとしたら、既に田中は坊から逃れ出ていたそうだ。それで管領が神人たちを宥めたらしい。

蔵光庵天神

二十五日、晴。蔵光庵の天神にお参りした。松崖・重有・長資ら朝臣・慶寿丸を連れて行った。その後、大通院へ行った。しかし用健が留守だったので、指月庵に行った。斜面の木が切られてしまい、木陰が薄くなってしまっていた。ひどい状況だ。

ところで、本照院の使者が来て報告があった。播磨国飾磨津別符のことで幕府の事務官である松田に尋ねたところ、とりあえず当方の証拠書類などを送ってほしいとのことだったそうだ。とても狭い領地のことなので、わざわざ将軍の決済をいただくのは難しいようだ。

田向経良、自家の経済的困窮を足利義持に訴える

二十七日、雨が降った。田向前参議がこのところ在京していたが、今日帰ってきた。石清水八幡宮放生会に田向長資朝臣が出仕する件で、田向家がひどく困窮した経済状態であることを訴状に書いて、室町殿の御所へ行き訴えたという。その時分、室町殿は朝廷や上皇御所へ行かれるというので、取り急ぎ訴状を差し上げた。室町殿はその訴状を受け取られて、懐の中へ入れられたそうだ。そして朝廷で室町殿は天皇陛下の前でこの訴状を読んで差し上げたという。広橋にも渡して読ませなさったそうだ。

山城国大野荘

田向家の領地である山城国大野荘を借り物を口実にして代官が現地を抑えている。代官を訴えるように、私から広橋に命じた。この件を広橋に聞いたところ、室町殿のご意向としては訴えることに何の問題もないようだという返事だったそうだ。このお返事がうれしかったですと田向前参議は語っていた。

また室町殿への八朔憑みの進物の件だが、武家諸大名や末々の近臣や小番衆に至るまで、一切禁止するとのことだったそうだ。

塔頭大通院と播磨国石見郷

二十八日、晴。用健がいらっしゃった。用健が住職である間に、播磨国石見郷が塔頭大通院の領地であることを将来にわたる大通院の寺法として決めておきたいという。それで、私が鹿苑院主に書状を送って、鹿苑院主と相談して、この件を決めてほしいと用健は言ってきた。田向前参議らとも協議して、なんとかそのように私の書状をだそうと返答した。

蔭蔵主松崖は天龍寺に帰った。

二十九日、晴。朝早く鹿苑院主への書状を書いて用健にお渡しした。それで用健は京都に出かけ、すぐにお帰りになった。鹿苑院主と相談したところ、問題ないでしょうとのことだった。それで急ぎ鹿苑院から大光明寺へこの件の使者を送りましょうと院主は仰ったそうだ。まずは問題なく話が進みそうで、うれしいことである。

八朔憑みの贈答品、まだ用意が整わない。それで、宮家はとても慌ただしくなっている。

重有朝臣も京へ出かけ、夜になって帰ってきた。

八月一日、「南呂（※）なり、めでたい兆しがある。すべての事においてとても幸せだ」と予祝した。

後小松上皇・称光天皇に八朔憑みを贈答する

朝早く後小松上皇様に八朔憑みの贈答品として大きな酒甕の酒海・地紋が竹で雀を打ちつけた銚子提・引合紙三十帖を差し上げた。いつものように冷泉永基朝臣を通して献上した。天皇陛下への御憑もいつも通り献上した。田向前参議が恒例の八朔憑みの酒宴一献を開いてくれた。すぐに味わって、ひたすら月始めのお祝いをした。

外様の家司である正親町三条・勧修寺・行豊朝臣・隆富朝臣・正永ら、それに今出川家の陽明禅尼や慈雲院主からも相変わらず贈答品が献上された。

ところで大光明寺長老に書状を送った。田向前参議が使者としてこの書状を持って行った。これは、塔頭大通院の規式を現在の住職の在任期間中にお定めになられるよう進言したものである。長老の返事としては、鹿苑院主や三会院主らと相談して何とか致しますというものだったそうだ。

※南呂（なんりょ）…陰暦八月の異称。

二日、晴。廊御方がいつものように二日御憑みとして一献の酒宴を開いてくれた。用健が来た。

三日、雨が降った。相応院主へ御憑みとして金銅製の三具足（※）・引合紙十帖を進上した。すぐにお返しをいただいた。祐誉僧都が同じく御憑みを献上してきた。

花園上皇・光厳上皇・直仁親王の歌会の短冊

ところで姪の鳴滝殿から故萩原殿直仁親王の御短冊数百首をいただいた。この短冊は、花園上皇・光厳上皇・前皇太子である直仁親王の御歌会で詠まれたものだそうだ。亡くなった鳴滝殿前住職は直仁親王の娘であった。この前住職がこの短冊を私に差し上げるように娘に申し置かれたそうだ。

※三具足（みつぐそく）…香炉・燭台・花立の仏具一組のこと。

貞成、娘の入江殿御喝食が弟のために贈ってきた茶菓子を大光明寺長老へ贈る

四日、晴。娘の入江殿御稚児が上品な茶菓子一折りを私の息子に贈ってくれた。すばらしい品である。すぐにそれを大光明寺へ送った。長老が近々引退する予定なので、その引き出物として贈ったのである。特に恐れ多くありがたいことですと長老は仰っていた。

冷泉永基朝臣が八朔の贈答品を献上してきた。

武家近習である桃井宣義の娘が山田香雲庵の新庵主となる

ところで山田香雲庵の新庵主が、今日、庵に入った。新庵主は、将軍の近臣である桃井宣義の十歳になる娘だそうだ。廊御方の養女となり、香雲庵のすべてをこの娘に譲与するという。

武家方の者が庵主になるのは望ましくない

それで、桃井父子や家臣たちが庵の修理や掃除等のために大勢やって来た。廊御方も庵に行った。私も思いがけず桃井宣義と対面した。武家方の人間が庵主になるのは望ましいことではない。それでも取り次いでくれた人がおり、奇縁というべきであろう。

香雲庵前御寮の真幸は三木善康と密通懐妊して、庵から逐電した

前御寮の真幸は去年の冬、田舎に帰ると言って、そのまま香雲庵から引退なさった。これは、三木与一善康と密通して懐妊したためらしい。それで香雲庵から逃げ出したようだ。真幸の父である四条隆直大納言禅門は、娘を勘当せざるをえないだろう。どうしようもない身の振り方だといえよう。

五日、晴。寿蔵主が八朔御憑みの贈答として、一献の酒を持参して来た。この二年間、寿蔵主から八朔の贈答は絶えていた。それを、このように再開したのは、神妙なことである。

六日、晴。葉室宗豊中納言が八朔御憑みの進物を送ってきた。

冷泉正永が来た。それですぐに双六の総当たり戦（※）をした。私が懸賞品を出した。私・宮家の女性たち・重有・長資朝臣・正永・慶寿丸らが双六を打った。私が勝った。負けた面々が一献の酒宴を準備してくれた。面白かった。

田向長資、経済的困窮を理由に石清水八幡宮放生会出仕を免除される

田向前参議が京都から帰ってきた。石清水八幡宮放生会に子の長資朝臣が出仕するのは、経済的に苦しいので、免除して下さいとお願いしていた。それに対して、お許しが出たそうだ。

※「総当たり戦」…底本では「廻り打ち」（廻打）とある。

足利義持が大光明寺に来た

七日、晴。朝早く室町殿が大光明寺にお入りになった。鹿苑院主・常徳院主海門・等持院主・等持寺住職・宗寿院主・大光明寺住職らがお相伴した。まず室町殿は退蔵庵にお入りになった。ここで軽食を済まして、次に蔵光庵にお入りになった。その後、大光明寺でお食事をとられた。そして食後すぐにお帰りになったそうだ。

大光明寺長老は近く引退なさる。この長老は塔頭大通院を造営した功績ある人だ。名残惜しいものである。

毎月恒例の連歌会、今月は当番幹事が決まっていなかったので、私が幹事役をした。参加者は、田向前参議・重有・長資ら朝臣・正永・善基・行光・禅啓・康知らである。夕方には百韻を詠み終わった。

法安寺薬師如来

八日、朝に雨が降ったが、夕方には晴れた。風呂に入った。その御、法安寺に行った。今年は法安寺の薬師如来にまだ参詣していなかった。それで法安寺に行ったのである。田向前参議以下、正永らを連れて行った。住職の部屋で少し酒を飲んだ。

藤原能子が危篤状態となる

ところで藤原能子前典侍禅尼が六月頃から病気に罹っているそうだ。それがこのところ悪化しているらしい。今となっては回復の見込み

も乏しいそうだ。それでお目にかかるために、東御方が前典侍禅尼が住む里へ行った。

播磨国比地

九日、晴。典侍禅尼が八朔の贈答品を献上してきた。すぐにお返しを送った。ところで、播磨国比地の祈祷用領地は禅尼が亡くなった後、円光院主尭範法印に譲与したいと先だって病気の折におっしゃってきた。その件を私は了承した。それで、尭範法印宛てに領地の支配を認める命令書を書き与えてほしいと典侍禅尼が申し入れてこられた。

およそ宮家関係の女性に与えるご恩地は、その一代限りのものである。宮家代々の御遺訓もそのように書かれている。しかし典侍禅尼の功労に免じて特別に譲与をお認め下さいと申し入れてきた。それで仕方なく、円光院主一代限りの間、比地を支配することは問題ないと了承したのである。

正永が帰っていった。

円光院主尭範に播磨国比地を安堵する令旨を発給した

十日、晴。重有朝臣が京都に出かけた。比地の祈祷用領地に関する命令書を重有朝臣に書かせた。これを円光院主尭範に持っていったのである。

大光明寺新住職の大淵和尚

さて大光明寺の新住職大淵和尚が寺に入った。大淵和尚は万寿寺の前住職であり、絶海和尚の弟子である。大淵和尚は寺に入ってからすぐに、宮家に来た。対面して、お茶を与えた。すぐに出ていった。

東御方が帰ってきた。典侍禅尼殿の容体は予断を許さない状態だそうだ。愛おしくもかわいそうなことだ。東御方のお土産として酒を飲んだ。東御方は正親町三条家にも立ち寄り、宮家が経済的に困窮していることを話したそうだ。正親町三条公雅大納言がいろいろと意見を述べたそうだ。

ところで今夜、午前一時に四条道場金蓮寺が火事になったそうだ。

時宗の四条道場金蓮寺の火事は自焼らしい

十一日、晴。四条道場の火事は、自ら放火したものらしい。その理由は、四条道場を七条道場金光寺の末寺にしなさいという、足利義量将軍のご命令があった。しかしそれは開山以来先例にないことなので、四条道場はこの仰せに随わなかった。しかしさらに厳しく命じられたので、四条上人は仕方なく命令に従った。それで四条上人は、七条上人から十念の戒を授けられたそうだ。しかし四条道場の僧たちは四条上人を追い出した。これは一寺滅亡だと言って時衆どもは自ら四条道場に火を放って、どこかへ姿をくらましたそうだ。

足利義量は時宗の七条上人を深く信仰している

近年、七条上人の念仏で奇特な事が起こるので、大勢の人が七条上人を信仰するようになった。義量将軍も七条上人をご信仰になって、今更ながらだが、四条道場を七条道場の末寺にしようとなさった。それに対して四条道場の時衆たちが反論したが、お許しにならなかった。およそ四条道場は古来、一つの宗派の単独の本山であったのだ。今度の火事は他からの放火だとする噂もあるが、実否は不明である。重有朝臣が京から戻り、このような世間話をしてくれた。

石清水八幡宮安居頭が今日、行われたそうだ。室町殿は清和院にお籠もりになっているらしい。

伏見宮家の困窮に付き、正親町三条公雅と冷泉永基に書状を送る

十二日、雨が降った。正親町三条公雅大納言と冷泉永基朝臣に書状を送った。先日、宮家が経済的に苦しいことを、東御方が正親町三条公雅に相談した。それで、書状を下されば、都合の良い時、後小松上皇様にその書状をお目にかけますと公雅が提案してくれた。また冷泉永基にも同様に書状をお送りするのがいいでしょうとも言ってくれた。まずもってうれしいことだ。それで公雅・永基の両方へ書状を送った次第である。

十四日、晴。用健がいらっしゃったので、雑談した。その後、伏見御所の

旧跡に行ってみた。重有・長資朝臣らも連れて行った。

十五日、晴。石清水八幡宮放生会は無事終わったそうだ。執行責任者筆頭の公卿は武者小路隆光大納言、参議の役は海住山清房朝臣、弁官は甘露寺房長、警備に当たる次将は一条公知朝臣だという。今年は長資朝臣が出仕できず、無念であろう。

十五夜のお月見

御香宮に行った。今夜は名月でいつものように型通りのお月見をした。前もって名月を題にして和歌を詠むように短冊を配ったが、宮家に人が居ないので和歌の披露はしなかった。ただ短冊を取り重ねただけである。

故治仁王の次女を尼寺の岡殿に入れる

十六日、晴。岡殿の尼衆である周瑞房が来た。兄葆光院の次女が岡殿にお入りになることは、昨年の春頃から決まっていたが、今まで延期されていた。急ぎお寺に入れて下さいと岡殿から申し入れがあった。それで入寺のことを取り計らうために、周瑞房が来たのである。

廊御方と兄の次女が周瑞房とご対面した。入寺の日時について陰陽師の賀茂在方朝臣に尋ねたところ、今月の十七日と二十九日が吉日だと言ってきた。それで二十九日入寺と決めた。

この件について室町殿にお伺いを立てるために、御庵主と相談した。この御庵主は崇賢門院藤原仲子殿にお仕えしている方で、広橋兼宣大納言の妹である。それによると、室町殿の御意としてこの入寺は問題ないとのことだった。それで急ぎ入寺させるよう取り計らいなさいという御意だったので、この日時で決めた次第である。御出立の準備で慌ただしくなった。

さて聞いたところによると、今日、石清水八幡宮神人の同僚間で合戦があったそうだ。これは安居頭の木引きの際に田中前社務との確執があった。このことが今日の合戦の原因らしい。

正親町三条公雅、後小松上皇に伏見宮家の窮状を知らせる

十八日、晴。正親町三条公雅から書状が来た。この伏見宮家が経済的に苦しいことを昨日、後小松上皇様に詳しく申し上げたそうだ。そして私の手紙もお目にかけたという。上皇様は同情なさっているご様子で、正親町三条宛てに御書を送られた。その御書も送ってくれた。「宮家が困窮のご様子、おいたわしく推察申し上げます。どうにかなんとかお考えになって、重ねて状況をお知らせ下さいと急ぎ宮家に申し入れ下さい」という内容の御書だった。まずは上皇様のご意向に問題がないようで、うれしかった。

宮家御領地の所在地などを一紙に記録して、上皇様へお目にかけたらいかがでしょうかと正親町三条大納言が提案してくれた。急ぎ記録を書き出しましょうと返事した。

廊御方が京へ出かけた。典侍禅尼の病気見舞のため、禅尼の住む里へお出かけになったのである。そして夕方、お帰りになった。病状は前と同様だそうだ。ただ言葉をはっきりと話せるようだったので、昔の話をしたという。ただ食事は一口も食べず、病気回復の望みは薄いように思われたそうだ。

十九日、晴。宮家の領地記録をとりあえず書写した。この写しを正親町三条に送った。そして領地回復のため、よろしく指南して下さいと申し添えた。

二十一日、晴。正親町三条公雅大納言から書状が来た。一昨日、上皇様のご機嫌をみて、宮家の訴えについて上皇様に詳しくお話したそうだ。上皇様のご意向としては宮家を決してなおざりにしないとの仰せだったという。恐れながらもうれしいことである。

それで室町院領六～七ヶ所の記録をまとめてお知らせしますので、上皇様のお目にかけて下さいと正親町三条に返事しておいた。

本照院から使者が来て、播磨国飾磨津別符について連絡があった。

目勝ち打ち

さて暇なので、囲碁や双六を打った。また、にらめっこをして一番勝った者に褒美を与えることとした。それで、兄の妻であった上臈が勝った。それですぐに酒宴となった。田向前参議以下、寿蔵主や善基らが参加した。

二十三日、晴。今日は彼岸の初日である。いつものように風呂に入った。

ミツバチとキバチの蜂合戦

ところで今日、御所の棟木の上にミツバチ（※）の巣があるのを見付けた。そこに、キバチ（※）が二～三十匹飛来し、ミツバチの幼虫を食べようとしている。それで巣の周りを数千匹のミツバチが集まり、キバチと合戦を始めた。四時間余り噛み合い、死んだり傷ついた蜂が多数でた。

遂にミツバチは負けて、退散した。キバチはミツバチの巣を食い破り、幼虫を食べた。ミツバチは千～二千匹も集まっただろうか。一方、キバチはわずか二～三十匹だった。それでもキバチが勝ったのである。死んだり傷ついた蜂が御所内に散らばって落ちている。希に見る不思議な事だった。ただし、蜂同士が戦うのは通常のことらしい。

足利義持の馬が人の言葉を話した

【頭書】さて聞いたところによると、最近のことらしいが、室町殿は御馬を近臣の伊勢にお預けになっていた。ところが、その馬が口を利いているのを馬屋の者が聞いたそうだ。辺りに人は居なかった。馬屋の上に居た人も同じく、馬が話をするのを聞いたという。馬がものを言うので驚いて見ていたら、馬がうなづいたそうだ。不思議な事なので、室町殿に報告されたという。その後、この馬は石清水八幡宮に神馬として引いて行かれたそうだ。

※ミツバチ…底本では「しし蜂」（獅子蜂）とある。獅子蜂にはスズメバチとミツバチの意味がある（『日本国語大辞典』第二版）が、ここではミツバチのことであろう。

※キバチ…底本では三日蜂（みかばち）とあり、みかばち（木蜂）は樹蜂（キバチ）の古名である。大形の蜂。

二十四日、聞いたところによると、室町殿御台所日野栄子殿のお母上が今日他界したそうだ。長患いしていたので、前もって没後の事についてはお決めになっていたという。鹿王院が葬儀を執行するらしい。

藤原能子前典侍が他界した

二十八日、晴。前典侍禅尼藤原能子殿が今日他界したそうだ。古くから宮家に仕えていて、その功労は特別なものがあるので、特に悲しみは深く、とてもかわいそうに思う。遺産を典侍殿の姪である右衛門督局が相続することに、何も問題はないそうだ。この相続の承認命令を出そうと後小松上皇様が仰っているらしい。

近年、典侍殿も右衛門督局も上皇様のお怒りに触れて、自宅謹慎なさっていた。今回の事で、右衛門督局は上皇御所へ戻ってよろしいと上皇様が仰ったという。

二十九日、晴。用健がいらっしゃった。ちょっとした一献の酒宴をご開催なさった。廊御方のお部屋で酒を飲んだ。これは亡き兄の次女が岡殿に入寺することへの餞（はなむけ）である。

夜になって、田向前参議と芝殿も一献の酒を持参して来た。これも兄の娘に対する餞である。やはりまた廊御方のお部屋で酒を飲んだ。

治仁王の次女が岡殿に寺入りして、真栄と名乗る

三十日、晴。亡き兄葆光院の次女であり鳴滝殿の妹でもある十一歳の姫宮が、岡殿にお入りになった。廊御方が軽食分の銭をもって姫宮のお供をなさった。姫宮の御服以下すべてのことが不十分で体裁がよくない状態なのだが、無事、お寺に入ったので、とてもうれしく、めでたいことである。今日は岡殿で御稚児に成られたそうだ。法名は真栄という。廊御方は二日間ほど岡殿に滞在するそうだ。

娘を門跡寺院の尼にするのは宮家代々の念願通りである

今年のうちに、私の長女が入江殿に入り、兄の次女がこうして岡殿にお入りになった。宮家代々のご念願の通り、替わることなく娘たちを寺に入れることができたのは、とても喜ばしいことだ。

夜に田向家で灯籠の供養があった。またその神事として相撲も行われた。

（続）